

20周年を記念し今年は少し長めの研修旅行で、9月21日から24日まで3泊4日で九州(別府温泉)に行ってきました。



地獄めぐり、アフリカンサファリ、湯布院などをまわり、特にアフリカンサファリでライオンやゾウなどを間近で見ることができ、直に餌をあげることができたのは貴重な体験で、みなさん大興奮でした。



会員向け学習会を開催しました

9月の勉強会は、中央区支部 支部長 荻野 浩代氏をお招きして、「親がもしも・・・の時に」をテーマにお話をいただきました。荻野氏は、10年前から介護支援専門員(ケアマネージャー)として仕事をされていましたが、現在はNPO法人「あったかい手」で相談支援専門員としても活躍されており、高齢者と障がい者両方の支援に携わっておられます。担当されている障がい者のうち約20名が一人暮らしをされているそうです。知的障がいの方も重度の方から軽度の方まで7名の支援をされている豊富な経験から、親が亡くなってしまった、または、病気になったり、介護が必要になってしまった・・・そんな「もしもの時」に必要なことや大切なことについて話していただきました。

荻野氏が相談支援に携わり、特に知的な障がいのある方を支援する際、キーパーソンとなる方は、やはり親御さんということでした。特に母親の影響は強く、突然亡くなった時の支援や、認知症が進行していることが判明した時の支援で感じたことを話されました。

両者とも本人の支援を母親が担っていたため、本人の食べ物の嗜好、既往症や服薬の有無、金銭管理の状況といった重要な情報が無く、日中活動先や支援機関

との結びつきがなかったため、家族以外の人との関係性を構築するのに時間を要したとのこと。その後、本人たちはこれをキッカケに福祉サービスを利用するようになり、充実した日々を過ごしているそうです。

お話を聞き、本人が生活していくために、どのように支援するのかを親身になって考え、努力を惜しまない荻野氏の支援者としての姿勢に頭が下がる思いがしました。

次に荻野氏が相談支援に携わり学んだこととして、「もしもの時」までに準備しておくべき物事について教えていただきました。

まず「絶対に必要なもの」として、次の3つを挙げられました。

①障害福祉サービス受給者証

(障害支援区分認定を受け、居宅介護を利用できるようにしておくこと。)

②障害者手帳・療育手帳等

③お金

(障害年金等、当面、生活するお金が必要。)

続いて「絶対に必要な人」として、次の3つを挙げられました。

①頼りになる相談支援専門員

(サービス等利用計画を作成するだけでなく、親身になってよく動いてくれる相談員。)

②訪問のヘルパーさん

(一人になってもグループホームに入るまでは、自宅で生活をしなければならない。)

③お金の管理をしてくれる人

(あんしんさぽーとや後見人が決まるまで、誰が管理するのか?できれば、親が活着しているうちに決めておいた方が良い。)

また、後見人がついていても障がい者の支援をしたことはなく、財産管理をするだけで必要なお金を出してくれない、上から目線で本人の立場に立って物事を考えてくれない、本人が困っていても解決してくれない等、残念な後見人の例も出され、たまにしか来ない後見人よりも、毎日の生活を支援する人にウェイトを

